

大阪文学学校とわたし

岩代明子

最初にこのリレーエッセイの依頼を受けたときは少し迷った。まだまだこれからも文学学校とのつながりは続けていくつもりなので、このエッセイを書くには早すぎるように感じたのだ。依頼には「まだ岩代チューターのことを知っていない。生徒さんがいるうちに書いていただければ」と添え書きされ、書いて、いくつかの顔が思い浮かんだ。その顔に背中を押された。

1. 学生だったころ

私が文学学校に入学したのは、九九年の秋期だった。十代のころから小説や詩を書いていていた私に、遠方に住む祖父はおりおり新聞に載った「大阪文学学校」の入学案内を切り抜いて送ってくれた。その祖父も亡くなり、超氷河期で就職できず、人生がどうにもならなくなっていた二十代後半、体験入学に参加する気になった。飯塚クラスの体験で、そのまま飯塚クラスに入学した。

翌春、文学学校史に残るニュースが飛び込んでくる。玄月さんの芥川賞受賞だ。文学学校は一躍メディアから注目され

た。飯塚クラスが玄月さんの出身だったこともあり、二次会のお好み焼き屋「DAN」ではその話題が多かった。飯塚チューターは玄月さんに、作者とへその緒がしつかりつながった人物で小説を書かねばならないとアドバイスをされて、それから作品が変わったと話をされていた。

当時の文校は喫煙可で、教室内はたばこの煙にかすんでいた。時代だったのか、それとも急な入学者の増加のせいだったのだろうか、組会の雰囲気も熱かった。自分のクラスはもちろん隣の議論も激しく、やいやいと大声が響きあっていて、一度などは激高した生徒が思わず立ち上がった勢いで、背中のセパレートがはずれかけたことがあった。翌年は秋吉クラスにうつる。クラスの雰囲気がよく、皆とチューターのお宅まで訪ねたことを覚えている。

さて、私は文学学校には「二年目のジんクス」があると感じている。早い人は半年ぐらいでそうなるかもしれない。入学してすぐは読んでもらうことが新鮮で勢いで書けるのだが、そのうちに批評の言葉が創作の時に響きたすのだ。「視点がぶれている」「描写が足りない」「時系列がわかりにくい」：

これらの言葉が脳裏をめぐり筆が重くなる。自分の書いているものに魅力が感じられなくなり、こんな文章何の意味もないという気持ちが出てくる。書けなくなるのである。私も二年目、そういう壁にぶつかっていた。脳裏に響いていたのは秋吉ユーターの「作品に社会性がない」という言葉だった。それで別の視点がほしくなり、三年目、詩の細見クラスにうつる。小説から逃げるようでもやしなかったが、「進級届」を出したとき事務局の小原さんに「力のある人はジャンルをまたぐんだよ」と言ってもらえ、気持ちが救われた。

細見クラスで新鮮だったのは、講義の時間があつたことだ。その講義でパウル・ツェラン「死のフーガ」を初めて読んで衝撃を受けた。その衝撃は十代のころに大好きだったSF作家のカート・ボネガット・ジョヤ、後に傾倒するようになったマラマッドと通じ合つて、今でも私の創作に影響を与えている。そしてまたこういつた読む体験にも助けられ、秋吉ユーターから投げかけられた「社会性」という言葉に自分なりに構えがもてるようになった。

当時私は医療・福祉の業界で働こうとしていて、資格取得のための実習や就職活動などで忙しくなり、通学が困難になつてきた。一年休学し初めて通教部にうつる。詩の「木澤クラス」である。作品を郵便局から文校に送るのが新鮮だった。スクーリングの二次会で、酔つて顔を真っ赤にされた木澤ユーターが僕の田舎にはネムが住んでいてと話していた。宮沢賢治作品をたどりなおす契機になつた。そしてまた一年休学し、就職して生活が安定したおりに、通学の「村岡クラ

ス」に入つた。村岡ユーターの「丁寧に、正確に、明晰に」という言葉は、創作だけでなくユーターになつたあと、批評を考へるとき支えになつた。

2. 学生委員会、そして同人誌

さて、私が本科に在籍していた二〇〇〇年といえど文校内ではもう一つ、大きな出来事があつた。在校生特集号の選考過程で選ばれた作品が差別の問題を含んでいて、発行責任者である理事会から発行は不可と判断されたことである。学生委員会が当時それは「六月号問題」と呼ばれた。選考過程で選ばれたものはそれまでは自動的に掲載となる慣例だった中、在校生特集号の選考がどのようなものかといふいは表現の自由と差別との関係とはどのようなものかという議論がなされた。当時学生委員だった私はそれに付随する冊子づくりや、「コスモス」の制作のために、文校に日参した。学校で徹夜したこともあるし、「DAN」の畳の部屋で朝まで寝かせてもらったこともある。今となればいい思い出である。

いま私は福祉分野で仕事をしているが、文学は福祉より、政治より、報道より先に、内側から、社会的な枠を超えて（あるいは時代さえ超えて）魂のところから、人々を救済する力をもっていると考えている。そして表現の自由はその意味でこそ尊い。このような考えの根っこにこの時の体験がある。

さて、こうして困難を乗り越えた学生委員会の仲間と、書いたものを互いに読み合うようになった。そのような会を五

年ほど続け、2006年在校生特集号に「トカゲ」という小説作品を応募し、掲載してもらった。その後、その作品が「大阪文学学校賞」をいただき「文学界」の同人誌優秀作にも選ばれるというふうに、とんとんと評価を受けた。在校生特集号から、というのが、学生委員だった私には特にうれしかった。「トカゲ」については面識がなかった故木辺チユーターからも評価と激励のお手紙をいただき、今も宝物である。その文校賞授賞式で日野チユーターから同人誌を作ってみればと助言いただき、その気になった仲間たちと同人誌「l'apnea」を立ち上げた。この同人誌が今も創作の場になっている。

3. チユーターとして

「トカゲ」の受賞後、しばらくして詩のクラスのサブチユーターをやらせていただいた。山田チユーターを補助する形で、詩の形式、音韻の奥深さを体験させていただいた。サブチユーターになって改めて多様な意見があること、批評が広がることの楽しさがよくわかった。仕事が忙しく平日に時間が取れなくなってきた、一年間しか経験できなかったが、心残りだった。その後、土曜日クラスができるということで、津木林チユーターの推薦で依頼があったとき、土曜日なら時間が取れると思ひ、引き受けることにした。その時、津木林チユーターから「チユーター病にならないように」と言われたことが印象に残っている。チユーターになると書けなくなるといふことがあるそうで、二年目のジんクスに似ているな

と思った。

チユーターとしての最初のころはもう、自意識過剰で悩んでばかりで、馬鹿なことを言っていないかとどきどきはらはらで、頼りないばかりだったと思う。そのうちに、メンバーにあるところは任せるといふか放り投げてしまえばいいのだという心持ちがわかってきて、少し安心して運営できるようになってきた。土曜日クラスは老若男女に偏りがないところが楽しかった。そのうちに子供ができ、二年ほど通教部にうつらせてもらったが、出産を機に仕事の量を減らしたことをいいことに、水曜日の昼間部に入った。隣が高畠クラスなのを心強く感じた。高畠チユーターには本科一年目のときに文章講座でお世話になり、「六月号問題」などを通して気にかけていただけようになった。その後、仕事はどうか、家族はどうかと、書くこと以外にも機会あるごとに声をかけていただいた。高畠チユーターが定年で文校を退任されることになり、その最後の組会で改めて挨拶をさせていただいた。このことは私の文校史のなかで、ひとつの区切りになっている。

私が住む三島郡島本町には一件だけ書店がある。阪急京都線、水無瀬駅をおりてすぐのところにある「長谷川書店」である。ありふれた町の本屋なのに海外文学が豊富で、たとえばノーベル賞で話題になる前からカズオ・イシグロやアリス・モンローなどが並んでいた。店主が同世代で自然に親しくなったのだが、その店でたまたま故川崎彰彦チユーターにかかわる会が催された。そのときは高畠さんから話をうかが

ったり、文学学校の図書から、川崎彰彦さんの著作物をお借りした。文校の歴史、枝葉の広がりが体感できる出来事だった。

文校との出会いはこれからも続いていくものと思っている。まあ、もしもそうでなく、ひっそりと疎遠になるようなことがあったら、十二万円をはらって、こそっと新入生になつて本科クラスにまぎれこめばいいのだ。だから今は、クラスの人と別れるたびに交わしてきた挨拶を。書き続けてさえいれば、またいつかどこかで出会うでしょう。作品でか、生身でかはわかりませんが。また、その日まで。